

縄文時代後期における社会構造の研究：広域土器分布現象と「縄文文化の東西差」の検討を通して

福永，将大

<https://hdl.handle.net/2324/2236324>

出版情報：九州大学，2018，博士（学術），課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏名	福永 将大			
論文名	縄文時代後期における社会構造の研究 —広域土器分布現象と「縄文文化の東西差」の検討を通して—			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	宮本 一夫
	副査	九州大学	教授	小山内 康人
	副査	九州大学	教授	溝口 孝司
	副査	九州大学	准教授	田尻 義了
	副査	同志社大学	教授	水ノ江 和同

論文審査の結果の要旨

本論文は、土器の属性分析を使いながら、縄文後期の九州から関東地域に至る広領域な土器編年を示すとともに、土器様式構造を明らかにした。さらに、西日本と東日本の縄文後期の土器様式構造の差を示し、情報伝達のあり方の違いを明らかにするとともに、情報伝達の差異を高精度胎土分析の結果から実証した。そして、東日本と西日本の集落構造や生業戦略の差から、社会集団の情報の広がりや集団結合の違いを考察した。

第1章では、縄文時代後期社会の研究史をまとめるとともに、土器研究の方法論を検討することにより、東西の土器文化の差異が強調されるようになる縄文後期後半期への移行プロセス、すなわち縄文後期中葉における日本列島規模の集団関係・社会関係の変動の実態解明を問題の所在とした。

第2章では、土器の属性分析によって、西日本から東日本に至る縄文時代後期中葉の広域土器編年を構築し、縄文時代後期中葉を3段階に時期区分した。また、関東地域における東北系文化要素が流入する過程を明らかにしている。

第3章では、構築したタイムスケールに基づいて、各分類単位、各属性単位、器種単位というように、様々な分析レベルから土器の時空間的動態について検討し、土器様式構造の東西差を示した。

第4章では、関東地方と九州地方を対象とし、よりミクロな土器様式構造の視点から、東日本縄文社会と西日本縄文社会のモデルケースとした。さらに集団関係・社会関係をより具体的に復元するために、集落の検討を行い、居住・生業活動の復元を試みた。

第5章では、土器を媒介とした人・モノ・情報の「移動」現象の実態を明らかにするため、栃木県中根八幡遺跡と大分県法垣遺跡出土土器の高精度胎土分析を行い、東日本・西日本縄文社会における情報伝達の差異を傍証した。

第6章では、これらの分析結果を踏まえ、縄文後期社会構造と「縄文文化の東西差」発現メカニズムについて考察を行い、西日本が開放的な情報の広がりを持つのに対し、東日本が閉鎖的な情報の広がりを持つことを明らかにした。さらに、東日本と西日本の集落構造や生業戦略の差から、社会集団の情報の広がりや集団結合の違いが生まれたという、縄文後期社会の東西差のモデル化を行っている。さらに、こうした東西2大土器分布圏が認められるのが縄文後期中葉であり、「東北系文化要素の影響拡大」と「西日本縄文社会の東日本縄文社会化」の2つの現象から、その画期の背景を説明している。

以上、本論文は九州から関東に至る広域土器編年の構築と様式構造の分析から、縄文後期の東西差を明らかにしたものであり、博士(学術)の学位に値するものと認める。